

丸山眞男や大塚久雄ら社会科学生の大看板が物故した今年、歴史意識の漂流を云々する声がしきりである。そ

ばこそ、地に足をつけた史論||試論の大胆な展開を望みたい。その意味で、刊行途中の平凡社「中世思想全集」の今後に期待できる。

山川出版社の「世界史大系」の重さには辟易させられるが、「世界史リブレット」の著者たちが本業で問いかけるものを検討する素材となる。社会史アプローチの課題では、從来の生活史的視点に加えて、ライフ・サイクルの側面に注目した訳書が相次いだ。ミノワ『老いの歴史』(大野・菅原訳、筑摩書房)

西洋史論||試論の大胆な展開を望む

### 高木勇夫

の歴史。スリッソン『酒飲み誘拐事件の謎』(三好信子訳、新曜社)は、アナール派の中訳、ユニテとスールニアの集合心性論を旧体制下の民衆に適用したもの。デュビー『アルコール中毒の歴史』(本多文彦監訳、法政大学出版局)とベローの監修『女の歴史』、こまれている。

は、飲酒大国フランスで評判の高かった研究所の翻訳。節酒団体の出版助成を得ながら、アル中撲滅運動の非をあげつらう内容が楽しい。ハイ女性の貢献とは、父や夫や兄(大野・菅原訳、筑摩書房)

弟の政治参加を側面からさげて、松本彰・立石博編著『ボーツ史』(大修館書店)。スボーツ史で見逃せないのが、稻垣正浩・野々宮徹・寒川恒一国的事情だけから革命史を批判してきた過去の歴史学への批判として読める。森山軍治『ボーツ人類学の到達点を示す』(ヴァンデ戦争)、筑摩書房)は、反革命運動の再評価につながるもの。中世史では、これまでアーネル派のショミニットによる『中世の身ぶり』(松村剛訳、みすず書房)が出色の出来。コレット『ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ』(高橋健次訳、草思社)を眺めて笑いつつ、歴史の根本原理は、身体と自然の非弁証法的発展と見つけたことだ。古代史ではローマ史古典の翻訳で定評のある國原吉之助の、タキトウス『同時代史』(筑摩書房)が大きな収穫。人間学としての西洋史の将来が、けっして暗くはないことの証しとしたい。(たかき・いさお氏)名古屋工業大学助教授・フランス近代史専攻)